

旧加賀藩政時代の 虫塚から学ぶこと(後編)

石川県農業総合研究センター
生産環境部 病理昆虫科

農業研究専門員 森 川 千 春

くもう一つの虫塚：岩淵の虫塚の謎>

虫の供養に関して、もう一つ余談がある。小松市教育委員会の資料¹⁾には「なお岩淵では、十六俵にして、西光寺跡に埋め、同じく虫塚とした。」とある。そこで岩淵町に探索に出かけた。加賀産業道路を、埴田からさらに小松方向へ進み約1km、軽海西交差点を左折してさらに約2km走り、ケアハウス前の信号のない交差点を右折して岩淵大橋(小さな橋であるが!)を渡ると岩淵町である。このあたりは埴田とは対照的に川沿いのいわば谷筋にあたる。住宅地図には「西光寺跡」なるものは見当たらず、とりあえず町内に一つある神社に向かったが虫塚はない。もう一度住宅地図を良く見る。すると、岩淵町公民館になにやら“円筒形のマーク”が記してある(これだっ!)。果たして、虫塚はあった(図4)。公民館前に丁寧に奉られていた。西光寺跡から明治時代に移築したらしい。埴田のものと同形だが、やや小さく、石川縣史第三篇³⁾には「その埴田にあるものは高さ五尺三寸、礎石の高さ一尺。岩淵のものは高さ四尺なり。」とある。実測では直径25cm、高さ135cmであった。やはり碑文が記されている。

大筋では埴田とほぼ同じものであるが、岩淵のものはやや短い。こちらは「緒言」を短縮した「短報論文」形式である(材料と方法、結果および考察、の部分を省略していないところが凄い!)。また埴田では漢字であったものが、岩淵ではカタカナに変わっている箇所が多い。埴田では埋められた虫は23俵、岩淵では16俵。「埋めた

虫の数が少ない分、手を抜いたのだろうか?」初めはその程度に思った。これは前半、当たっていたが、後半、まったく外れていた。なんとなく“比率”が気になったのである。埴田の虫塚の碑文は175文字、簡単な比例計算をしてみよう。23俵:16俵=175文字:χ文字 χ≒121.7 岩淵の碑文の文字数はなんと122文字である! 手を抜いた、などとはとんでもない不謹慎な話だ。虫の数に文字数をピッタリ合わせてある。この文字数の

図4. 岩淵の虫塚(右は碑文)



當年七月中旬頃ヨリ俄ニ稻株ヨリコヌカ虫多生シ
悉稻ヲ枯シ一統ナンキニ及布木綿ノフクロヲ以テトリ
集メ候虫此所ニ拾六俵埋ヲク若此末虫生ル時ハ草修理ノ
頃早ク木ノ實油ヲ用ユレハ愁ウスカルヘシ余ハ除蝗録
ニ委シ虫ノ愁ヲオソレ後年ノ記録ニ建之畢
天保十年九月建之

一致は、霊を慰めるというより、むしろ崇りを畏れていたのではないかと思わせる。碑文を墓碑銘として虫の霊を鎮め、石碑によって封じようとしたのであろう。

さて、そうなってくると当然考えるべきは、埴田を「正」とすると「副」に位置付けられる岩淵の虫塚の位置である。まず思い浮かぶのは鬼門であるが、これは丑寅(北東)の方角。岩淵は徳橋組の辰巳(南東)の端にある。“辰巳”“方角”で検索をかけると興味深い記事に当たった。愛知県北設楽郡の「花祭り」に関するもので“東栄町の場合、<辻固め>は本来「辰巳」の方角つまり「南東」に”¹³⁾とある(これだっ!) 「辻固め」は悪霊の侵入を防ぐもの。当時、虫害は悪霊のしわざとも考えられていた。これならば話は早い。この「花祭り」は、釈尊降誕を祝い誕生仏に甘茶

を掛ける「仏生会」のことではない。天竜水系に伝わる、悪霊を祓い五穀豊穡を祈るもので⁸⁾、柳田国男に「苟しくも民間芸術を談ずるの士は之を知らなければ恥」とまで言わせた²⁾祭(昭和51年・重要無形民族文化財指定)である。愛知県といえば加賀藩初代藩主・前田利家の出身地。芸能好きで知られる利家が「花祭り」を知らないはずはない。これは幾分こじつけの論理かもしれないが、利家は長篠の合戦における設楽原決戦で鉄砲足輕を指揮している。北設楽出身の兵もいたのではないか。

さらに信憑性のあるものがある。古老の言に依ると、「花祭り」の起源は、延喜(901~923年)の頃、一人の聖が「加賀白山」の祭神「菊理姫尊」の分霊を東栄町古戸の地に祀ったことにあるという^{1, 2)}。この古戸の「白山神社」では「花祭り」に先立ち「白山祭り」が行われる¹²⁾。いっぽう、徳橋組のあたりは白山信仰の寺院として白山五院の下に位置する中宮八院のあった中心地である¹⁰⁾。天竜水系から信州戸隠、さらに越後栃尾まで続く山岳地帯は修験者や戦国武将の道でもあり、戦時において山伏(修験者)は呪術や伝令、間諜(スパイ、密偵)を担っていた。中でも加賀国白山は、今川氏親から遠江国での先達職を、豊臣秀吉と徳川家康(後、徳川家も同様に)から三河・遠江・駿河(愛知県東部~静岡県中西部)での先達職を保障されていた¹⁵⁾。先達とは峰入などの修験道の修行を指導する者である。先達職を保障され、三河・遠江・駿河を駆け巡っていた白山信仰の修験者が、白山の祭神を祀った社を訪れるのは当然のことであろう。古戸を訪れた(あるいは長期滞在した)修験者によって、「花祭り」における辰巳の方角の「辻固め」の神事が徳橋組に伝えられていても不思議ではない。事実、前出の「(岩瀨)町内に一つある神社」は「白山神社」なのだ!

岩瀨の「白山神社御造営記念碑」には、「白山神社は中宮八院の一つ善興寺の鎮守にしてもと加比曲の山頂に有り天保年間に町内の中心部に勧請し・・・」との由来が書かれてある。虫塚を建てた同じ時期にわざわざ山頂から移しているとはただごとではない。西光寺跡(当時すでに“跡”であった)はまさに徳橋組の南東端・岩瀨の村はず

れ「辻固め」の位置にあったのではなからうか。そして、「辻固め」の虫塚を守る岩瀨村では、虫塚の建立と同時に勧請(神仏の分霊を移して祀る)した「白山神社」で、悪霊封じ、五穀豊穡の祭事が行われていたとは考えられないか。

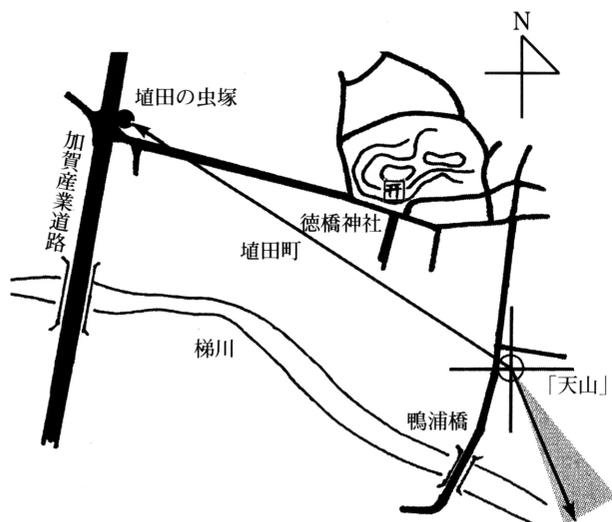
さらにもう一つこじつけてみたい。「花祭り」において、「辻固め」と対をなすものに「高根祭」がある。「高根祭」とは、花宿(花祭りの場)の小高い地を選んで祭り場とし、幣を立て供物を献じ、天や山よりの諸神霊を祭り、悪魔や天狗をここで防ぐもの^{8, 9)}で、以前は戌亥(北西)に設けるのが基本であった¹⁵⁾。「辻固め」とは、花宿の高根祭の祭り場と反対方向の平地に幣を立て供物を献じ地上の諸霊を祭り、悪魔、天狗をここでも防ぐもの^{8, 9)}で、辰巳(南東)に設けるのが基本である¹⁵⁾。この二つをあわせて「かどじめ」という²⁾。先にもふれたが、埴田の虫塚は十村在所の小高い地点にあるのに対し、岩瀨はまさに谷筋に向かう平地である。加えて、埴田と岩瀨は北西と南東の位置関係にある。「幣」を「虫塚」に、「花宿」を「十村在所」におきかえるだけで双方の関係はみごとに符合してくる。ここに広大な範囲におよぶ「かどじめ」を完成させようとしたのでないか。

「十村在所」における「祭場」も特定してみよう。埴田の虫塚の東400m、埴田の中心部には「徳橋神社」があり、今でも虫送りの祭事が執り行われている。「徳橋神社」は、元「稲荷社」と言い、同じく埴田にあった「宇野神社」と「白山社」(これだっ!)を、明治40年に合祀し改称している¹⁰⁾。合祀前の「白山社」は「村の南方天山の地」¹⁰⁾にあった。埴田町の古老・池田勇氏によると「天山(てんやま)」は現・徳橋保育所のあたり、すなわち徳橋神社の南東300mの位置、にあったという(図5)。山の土は梯川の堤防工事に使われたため、今では平地になっている。この「天山」から見た方位を分界としてとらえると、埴田の虫塚は「戌亥」の範囲内にあり、岩瀨町全体(西光寺跡がどこであったにせよ!)も「辰巳」の範囲内に入ってくる(図5)。なによりも、「天山」は引越して来た田中家が最初に居を構えた地であり、「白山社」は「田中家が屋敷神として創祀したもの」との推論も提起されているのだ¹⁰⁾。田中家と

白山信仰も繋ってくる。

図5. 「天山」と二つの虫塚の位置関係

矢印は二つの虫塚の方角を、網かけは岩瀨町の範囲を示す。



考えれば考えるほど「花祭り」との関連が浮かびあがってくる気がしてならない。二つの虫塚は対になってこそ意味を持つ。「埴田の虫塚」ばかりがクローズアップされている感があるが、「岩瀨の虫塚」の持つ意味は再考されるべきであると考える。

岩瀨の虫塚の謎解きを試みるなかで見えてくるのは、表向きは、淡々と科学論文然とした碑文により後世のための教訓を残しながら、その裏側では、農民感情への配慮を忘れず、碑文を練り文字数を合わせ、一つは中心の「十村在所」に「高根祭」として神霊の加護を祈り、もう一つは「辻固め」として「辰巳」の方角に建てて悪霊の侵入を防ぎ、この二つの虫塚が作り出す結界「かどじめ」の中で祭事を執り行い、農民を虫の愁、すなわち崇りから守ろうと腐心する十村役、田中三郎衛門の姿である。

<おわりに>

実は、この付近一帯、非常に史跡の密度が高い。それも“ビッグ・ネーム”ばかりである。「埴田の虫塚」から300m金沢より（一つ手前の交差点）には加賀藩第三代藩主・前田利常を茶毘に伏した地、「灰塚址」があり、昭和二十九年九月建立の「加越能国主 従二位前田利常公灰塚之址」の石碑が建っている。埴田から「岩瀨の虫塚」まで

図6. 虫塚周辺関連史跡の位置関係



は約3kmの道のり、岩瀨からさらに700mほど鳥越方面に進んだ原町は、平清盛の寵愛を受けた白拍子「仏御前」の生没地、小松市指定文化財「仏御前の墓」と「屋敷跡」がある（図6）。そして二つの虫塚を建てた十村役・田中家は源義経に兵法を教えた鬼一法眼の末裔と伝えられる。多様な史跡であるが、それぞれが無関係ではない。稿を起すにあたり、インターネットで検索してみたが、土地柄、中学校・高等学校の自由研究、課題研究で個々の史跡を研究したのが見られた。しかし、相互の関連性について考察したものは、まだ無いようである。さらに一歩進んで、この関連性を研究するのも面白いのではないかと。平家ゆかりの仏御前の眠る地のそばに、源義経にかかわる系譜を伝える十村が入ってくる意味など、きわめて興味深い。仏御前の平家（寵愛を受けたとはいえ早々に清盛のもとを去っている）や村人（村人は崇りを畏れていたという伝承もある）に対するスタンスが複雑微妙であり、そこに源氏の名が絡んでくる。

この源氏の名、もう一つ別の意味もある。平家の武将、斎藤別当実盛が稲株につまずいたために討ち取られ、その怨霊が実盛虫と化し稲を害するとの伝説である。この実盛、元は源義朝の家来で

あり幼少の義仲を助けて木曾に逃がし、後に平宗盛に仕え、そして義仲の家来に討ち取られている。やはり複雑微妙な立場である。西日本では「虫送り」のことを「実盛送り^{さねもりおくり}」という。虫送りの囃し詞を「虫送り系」と「実盛送り系」に分けると、「実盛送り系」は大阪以西に分布する⁷⁾。しかし、実盛が討ち取られたのは石川県加賀市（篠原の戦い）である。ここでもまた「実盛塚」や「首洗池」の史跡が関連してくる（図6）。石川県の「実盛塚」は西日本でいう虫供養のためのものではなく、実盛本人を供養したものだ。「首洗池」には実盛の首を抱きしめ嘆き悲しむ義仲の像が建てられている。篠原古戦場（北陸自動車道・片山津インターそば）と埴田の距離は直線にして約15km、まさに元祖「実盛虫」か？ いや、逆の見方をすれば、「ご当地」であるが故に「平家物語」や「源平盛衰記」の人気者・実盛を害虫扱いすることを拒んで「虫送り系」に入ったとも考えられる。実盛の怨霊化虫伝説の起源・流布・拡大については多くの考察（斎藤実盛由來說を退けるものも多い）がなされてきているが、この伝説の流布・拡大を拒む要因にふれたものは見当たらない⁵⁾。悲劇、そしてある種の美談として伝える土地柄に化虫伝説を受け入れる下地はないであろう。実盛伝説の起源、由来の真偽はともかく、当時、西日本を中心に実盛怨霊化虫伝説は広く受け入れられていたことに違いはなく、これを受け入れるにせよ、拒むにせよ、稲作の指導監督をする十村が源義経の師の末裔であることにはなんらかの政治的あるいは信仰的な意味があったのではないか。興味はつきないところであるが後の研究に委ねることにしたい。

加賀産業道路は軽海西交差点よりさらに小松方面へ進むと約2 km、八幡温泉東で国道8号線小松バイパスに合流する。福井方面よりお越しの場合は小松バイパスを八幡インターで降り、鳥越方向へ右折すると加賀産業道路に入る。ぜひ一度、加賀藩政時代の叡智の結晶に触れていただきたい。

今回、植物病理屋が虫塚について執筆することになったのは、石川県植物防疫協会発行の「石川県病害虫診断防除ハンドブック」の編集に携わった際、表紙に「埴田の虫塚」を用いるために、当センター生産環境部長（当時：病害虫防除室長）

の東川博明氏に碑文の現代文訳を依頼したところ快諾され、通説であった「虫の菩提を弔う」に倣わず「害虫防除の大切さを肝に銘ずるため」という農業研究者らしい絶妙な意識で問題提起されたことによる。氏の見識に敬意を表し、多くの示唆を与えていただいたことに深謝する。

また、資料をご提供いただいた小松市教育委員会の檜田誠氏、「天山」の位置の特定にあたって親切丁寧かつ迅速なりレーでご対応いただいた、埴田町町内会長・西野昭定氏はじめ小松市立国府公民館館長・山越隆氏、埴田町の池田勇氏ほか埴田町の方々に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 愛知県北設楽郡東栄町振草古戸／発行 奥三河古戸の花祭 1965（「神々の里の形」より孫引き）
- 2) 味岡伸太郎 神々の里の形 グラフィック社 2000
- 3) 石川県／編 石川県史第三編・藩治時代下石川県図書館協会 1974（昭和15年発行の復刻版）
- 4) 石川県能美郡役所／編 石川県能美郡誌 石川県能美郡役所 1923
- 5) 伊藤清司 サネモリ起源考 青土社 2001
- 6) 大蔵永常 除蝗録（小西正泰・現代語訳）日本農書全集15 農文協 1977
- 7) 岡本大二郎 虫獣除けの原風景 社団法人日本植物防疫協会 1992
- 8) 北設楽郡花祭保存会 重要無形民俗文化財奥三河の花まつり 1977
- 9) 北設楽郡花祭保存会 花祭語彙集 1981
- 10) 国府村史編纂委員会／編 国府村史 国府村 1956
- 11) 小松市教育委員会「埴田の虫塚」
- 12) 新城南北設楽広域市町村圏協議会 奥三河の祭事記 新葉社 1995
- 13) 竹内敏規 闇の日本史 特別企画展「花祭り」
http://www004.upp.so-net.ne.jp/dhistory/tv_hana.htm
- 14) 田村市太郎 朝倉農芸新書11「稲作被害診断と対策」朝倉書店 1955
- 15) 東栄町教育委員会／編 東栄町史・伝統芸能編 東栄町教育委員会 2004
- 16) 平井一男 「ツマグロヨコバイ」の項 日本農業害虫大辞典 農文協 1998
- 17) 平井一男 「トビイロウンカ」の項 日本農業害虫大辞典 農文協 1998
- 18) 矢ヶ崎孝雄 「国府村」の項 石川県大百科事典 北国出版社 1975